

## 神々しく生き返ったバッハ

ワウター・ドゥコーニクとそして彼の率いるヒルデブラントコンソートによって

批評：クラシックセントラル フィールレ・ドゥクノッパー

訳：中丸まどか

ここ最近、我々クラシックセントラルはワウター・ドゥコーニク率いるヒルデブラント・コンソートの音楽家たちの芸術性を追跡している。ドゥコーニクの表現方法—バッハのオルガン音楽をバロックオーケストラによって観客に届けるという—はまたしても「バッハとルターに捧げる大ミサ」の小編成版によって国内外の称賛を受けることとなった。

### 記念碑的なミサー バッハとルターに捧げる大ミサ 1739, そして 2017.

どのような技法をとってこの作品は為されたのか？何はさておき、この作品はひじょうにマイナーな「クラヴィーア練習曲集・第三部」のスコアから産声を上げた。いったい誰がオルガンのスコアを少なくとも5本の弦楽器と5声のスコアに拡大できるというのだろうか？その作業はひじょうに綿密なものである。オルガンから弦楽器に音を移していく作業は極度のケアをもって行われなければならない。このようにしてこそバッハ自身がオルガン音楽を書いた技法を受け継ぎつつも、それでいて音楽がさらに高みへと上り詰めることが出来るのである。

コンサート終了後、これは一生涯に一度の作品であると私が言うと、ドゥコーニクは謙虚な類笑みをたたえながら「そう、まあ6年ほどかかったでしょうか」と答えるのであった。

さて、ここへさらに歌への編曲が加わる。歌詞はその当時にルターが聖書について言及したものが選ばれた。ドゥコーニクはこの作業にはバッハのカンタータへのアプローチを研究したそうである。歌詞は音一つ一つ、それぞれの声部に思慮深く配置されていた。

果たしてその結果は如何に？神々しい、それでいてバッハのスタイルに極めて忠実なミサの誕生である。弦楽器はその苦難の表現にひじょうに美しいアクセントを与えていた。歌が与える自然な重みと感情のパレットは、オルガンとの対話を絶え間なく織りなす弦楽器とともに完璧

な調和を生み出した。観客には演奏者からの緊張感が伝わってくるが、その緊張感は作品に込められた親密さと情熱をさらに高尚なものにするかのように作用していた。これこそがバッハの音楽の縮図と言えるのでは無いただろうか…？キリスト教から靈感を受けたそれはさらに情熱の天体への旅、魔法のような世界の高みへと誘う。そこには確固とした数学的な論理の制限がありつつも、

音楽そのものがその責任を貫き全うする。それは…そう。まさに徹底的にバッハなのであった。ここで特筆すべきことは、我々の耳を喜ばせてくれた音楽家たちは全てこの地域から育った若手のプロフェッショナルであるという事だ。それがさらにこのプロジェクトを特別なものになっている。フランダースの若手の音楽家たちがこの音楽界を国際的な地位へと誘ってくれているのだから、我々はなんと恵まれている事であろうか。

バッハは言ったものだ。「勤勉であれ」と。

クラシックセントラルは10月12日に行われる大編成版の世界初演を楽しみに心待ちにしている。

このプロジェクトのCDレコーディングをサポート？それならばこちらを参照の事！

<https://www.crofun.com/nl/project/grosse-messe-1739-fur-bach-und-luther?userslug=20662-wouter-dekoninck#.WbUKr8hJbD4>

注1：このクラウドファンディングは既に終了しています

注2：この記事はクラシックセントラルのフィールレ・ドゥクノッパ氏による大ミサの批評を日本語訳にしました。「バッハとルターに捧げる大ミサ 1739」は2017年8月9日に記念すべき世界初演の演奏会が St-Geertruikerk, halfmaartstraat, 3000 Leuven で Hildebrandt Consort

( <https://www.hildebrandtconsort.org/> ) により行われました。

<https://klassiek-centraal.be/recencies/concerten-recencies/bach-bovennatuurlijk-benaderd-door-wouter-dekoninck-en-zijn-hildebrandt-consort/>